

Die Eiche

ディ アイヘ
http://www.jdg-chiba.com

Japanisch-Deutsche
Gesellschaft der Präfektur
Chiba

〒270-2214 松戸市松飛台556-12
Tel./Fax: 047-385-1456

Mail: info@jdgc-chiba.com



協会Home Page

ナショナリズムと現代 青壮年部部長 勝見 浩明

この頃の世界情勢を見ると、ナショナリズム的な視点による国際政治か、グローバルな視点による国際政治かで見ることができると思います。ロシアのウクライナ侵攻は、「ウクライナは、ロシアと一体性を持つ」というロシアからの一方的な「ナショナリズム」の押し付けに起因していると思います。EU諸国の中で自国の利益を追求してロシアとの経済的な結びつきを維持するハンガリーもナショナリズム的な路線とも受け止められます。9月最終週、イタリアの議会選挙では、Georgia Meloni氏を党首とする「イタリアの兄弟」というムッソリーニの政治を支持する極右政党が大勝利、中道右派連立政権を組み、イタリアの利益を優先した動きが顕著となりそうです。アメリカの前政権の「アメリカファースト」もナショナリズム志向の政治スタイルであったかと思えます。グローバル経済が前提となって久しく、もはや一国だけの都合では、つじつまが合わなくなっている状況にもかかわらず、ポピュリスト、独裁体制の国には、ナショナリズム的な要素を感じます。

ドイツに目を転ずると、これから冬を迎えるにあたり、ドイツの報道を見てみると、ドイツ社会の動向を垣間見ることができそうな気がします。ベアボックドイツ外相は、9月上旬、ウクライナの攻勢によりロシアによって占領されている東部地区が解放される動きの中で7日のドイツ連邦議会にて「ウクライナ人の人命以上にガス料金を心配する人々を批判」。独外相の視点は、ウクライナにおける戦争は、明らかにウクライナ一国の問題ではなく、自由、平和、民主主義をEU全体、USAなど同じ価値観を有する国々との連携で捉えています。ナショナリズムという狭い概念で物事を見ていません。



ベアボックドイツ外相

これに対してドイツの左派（Die Linke）政治家のヴァーゲンクネヒト氏は、「ドイツ政府のロシアへの経済政策は、誤りである。ロシアからのガス供給を止めることにより、国内のパン屋さん、手工業者を倒産に追い込むのか。ドイツ国内産業を滅ぼすことは、ウクライナへの手助けにはならない」としました。報道では、このままガス代が高騰したままの場合、パン一つが10EURになるという記事を見かけました。AfD（ドイツの為の選択）という右派政党もこの左派政党と同様、政府のウクライナ支援しすぎであり、国内政策を重視すべきというスタンスです。



左派政治家Wagenknecht

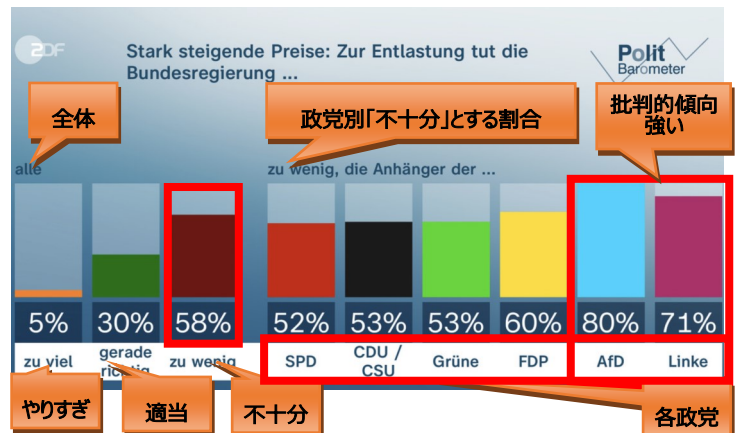
これから冬を迎えるに際して、日々の生活費にさらに窮する人々には、崇高な欧州レベルの目的のためにウクライナ支援を重視するよりも、日々の暮らしを重視、ナショナリズム的なスタンスになりやすくなるのではないかと思います。実際、ベルリンなどいくつかの都市で反政府デモが起きており、直近（9月9日時点）のZDFの政治世論調査（https://www.zdf.de/politik/politbarometer）の中

か）によると、野党のCDU、Die Linke、AfDが微増、与党のSPDは、現状維持ですが、連立与党のDie Grüne、FDPは、微減です。



出典:ZDF/次の日曜日に投票するとするとどの政党に投票しますか

先日、与党が作成した光熱費高騰に対する国民の生活負担軽減策について各党支持者全体でみると、58%が少なすぎとしています。欧州の牽引役のドイツの国内政治が、国内政治の分断（EU、USA陣営の自由、民主主義の堅持か、ナショナリズム的な国内経済優先主義）に陥るのか目を離すことができません。



出典:ZDF/物価高騰に対して政府は、負担軽減策を講じているか？

尚、ナショナリズムに関しては、国・国家レベルでの思考と捉えましたが、そもそもナショナリズムを考える上でその地区で生活する民衆がどの国家へ所属しているのかという点における「ナショナリズム」の視点があるかと思えます。ドイツにおける民衆レベルの「ナショナリズム」（国家帰属）は、いつ頃、発生したのかという点を考えますと、白水社刊『アルザスの言語戦争』P.82には、18世紀中頃から19世紀初頭、ドイツの哲学者フィヒテが『ドイツ国民に告ぐ』の中で「同一言語を話す者は、一つにして不可分」と訴えたそうです。フランス革命時、ジャコバン派は、「一国、一言語」の主義からフランス革命の理念を周知するため、フランス語の伝播に力点を置きました。ドイツ民族主義者には、「一言語、一国家」として捉えられ、ドイツ語使用地域が、ドイツ国家のベースとなったとあります。この時期に注目して、独仏の領土紛争にの対象となるエルザスロートリンゲン、旧ドイツ領であるこの地域に関して、今年12月に昨年に引き続き、青壮年部ドイツ歴史研究会の活動の一環、ドイツ大使館による文化事業助成対象プログラムに指定された「エルザスロートリンゲンの講演」を衣笠講師－神戸大学大学院国際文化科学研究科を予定しています。詳細、別途、ご案内致します。

ドイツの街紹介

タウバー川を望む丘の上の町

-Rothenburg ob der Tauber-

ドイツは工業国でありながら、風景は大都市を除くと中世の街並みを残した小規模な町が点在し、それを囲んだ広大な畑と森を思い出される方が多いと思います。ロマンティック街道の起点を南下して約50キロのところに、人口約1万人余りのローテンブルクがあります。この町の起源は9世紀ごろで、今も中世の面影をほぼ完全に残していて、12世紀ごろに作られた城壁のある街並みとして知られ、かつては日本人ツアーで賑わっていた旅先の一つです。

はるか昔の駐在員時代には、日本からの来客を頻繁に案内していました。また、定年後、幾度か訪れましたが、のどかな田園風景に囲まれた中世の町は印象的でした。

城壁の門をくぐって旧市街へ入ると、町の中心のマルクト広場には16世紀のゴシック様式の市庁舎があり、その高い塔から町全体が見渡せます。また、市庁舎の隣の市議宴会館の壁面には、30年戦争で占領されたこの町の市長がビールを一気飲みして市参事会の斬首を免れた伝説にちなんだ仕掛け時計があり、町を救った歴史を伝えています。

マルクト広場を下ると木組みの家とジュピター門の塔が並ぶブレンラインと呼ばれる中世の風景を色濃く残した場所があります。

数年前に、この通りに面した小さなホテルに泊まり、3階の窓から石畳の道を覗いていると、アジア人の団体客を多く見かけましたが、残念ながら日本人の団体はほとんど見かけられず、過去に比べて近年は日本とドイツの往来が少なくなった一面を感じました。

その他の見学先としては、聖ヤコブ教会の2階の「聖血の祭壇」の彫刻、不気味な雰囲気のある法と刑罰の中世犯罪博物館、等があり徒歩で回れます。また、近くの門を出れば城跡に作られたブルグ公園があり、ローテンブルクの町並みやダウバー溪谷が見渡せます。

ドイツのクリスマスと木工人形などに興味のある方は、ケーテ・ウォルフファルト本店があります。一年中クリスマス商品を揃えており、伝統的な木工人形の他に民芸品などもあります。

有名なお菓子としては、シュネーバル「雪の玉」という、細いパイ生地をボール状に丸めて油で揚げ、その上に粉砂糖をかけたサクサクした美味しい銘菓があります。

最後に、旧市街を囲んでいる城壁の上にある屋根付きの小道を散策して壁内の風景を見ていると、現代から中世に戻った気分になります。

この町から更に南へロマンティック街道は続き、フッセンまでの約200キロ余りの街道沿いにはディンケルスビュール、ネルトリンゲン、アウグスブルク他の町があり、中世都市の歴史とその美しい街並みを私たちに見せてくれます。

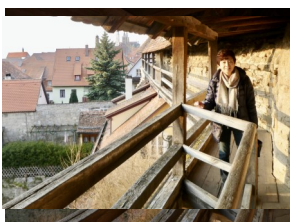
コロナの為に旅行が遮られても、いつかはまたドイツへ、の夢は膨らむばかりです。(常任理事：志賀 久徳)



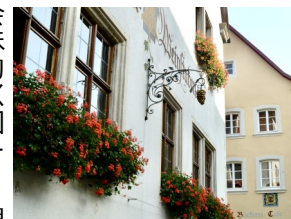
市庁舎と市議宴会館



ブレンラインの風景と
監視塔



街を囲む城壁の通路



城壁内のホテルの窓辺



ケーテ・ウォルフファルトの前

近藤 貴子さん

日独交流160周年友好賞を受賞

-日本の建築文化、文化財保護に努力-

四街道市在住の近藤貴子さん(1999年入会)に7月25日、駐日ドイツ連邦共和国大使公邸(東京都港区)で開催された授与式において、日独友好賞の「感謝状」が贈られました。

日独友好賞は、日独交流振興協会(大坂靖彦会長)がドイツ大使館や全国日独協会連合会等の後援を得て、いわゆる草の根交流運動に長年にわたり貢献している人や日独交流の懸け橋となる活動を行っている人に与えられるもので、今回の「日独友好賞」の表彰は10年前の「日独交流150周年」に続いて2度目の実施となりました。

今回の受賞者は日独両国で32人(日本側ドイツ側それぞれ16人ずつ)、本来は2021年の日独交流160年の記念事業の一環として企画されていましたが、新型コロナウイルスの影響により授賞式は1年延期されていたもの。

近藤さんのご自宅は国登録の有形文化財。近藤さんはこれまで、その日本の建築文化や文化財保存を通して、展示会やコンサート、見学会等の日独交流を続けてこられました。具体的には、ミハエル・クーデンホーフ＝カレルギー氏の作品展を開催したり、千葉県日独協会と共催で日独交流チャーターコンサートの開催や文化財見学会バス旅行などを企画したりしました。

近藤さんは、「ドイツは私の第二の故郷。人生の半分はドイツやオーストリアと共に過ごしてきたので、ご恩返しができればいつも思っています。日本の文化、特に伝統工法の建築文化や支える職人さんの技術は、貴重なものですが、若い人が育つ土壌や現場が少なくなっているの、協力し合って大切にしていければと思っています。」と日独の若者に対する期待と故郷への熱い思いを語ってくれました。

(常任理事兼事務局長：植松 健)



懇談会サロンー伊藤光昌氏講演

について

7月27日(水)午後7時から、(公財)日独協会主催会員懇談会サロンで当協会の名誉会員伊藤光昌氏が講演されました。テーマは「1960年代のドイツの状況とアルト歌手 ゲルトルーデ・ピッツィンガーの人と音楽について」。

伊藤氏はベルリン工科大学への留学(1963年～66年)、フランクフルト・アム・マイン現地法人ハーモニック・ドライブ・システムズGmbHに駐在(1968年～89年)され、現在は、(株)ハーモニック・ドライブ・システムズで取締役会長の任に就かれています。

戦前から戦後にかけてアルト歌手として大活躍したゲルトルーデ・ピッツィンガーとの交流は70年代にはじまり、彼女の音楽人生についての貴重なお話2を伺うことができました(交流については著書も出



版されています)。

また冷戦時代の緊張感あるドイツの様子、東独の方との交流や、東西ベルリン双方での音楽鑑賞会について。さらに1979年フランクフルトのレストランで、加藤吉昭当協会初代会長と偶然出会った事等、講演は終始心惹かれるエピソードが満載で、大変楽しいひと時となりました。

(常任理事：本橋 緑)

香川日独協会会長 金谷会長を訪問

残暑厳しい9月5日(月)、香川日独協会から住谷幸伸会長が千葉県日独協会を訪ねてこられ、金谷会長、志賀常任理事そして植松事務局長の3名にて歓待いたしました。今年の6月に香川日独協会

(<https://jdg-kagawa.org/>)の会長に就任したばかりの住谷会長は、実は同日開催予定だった「Dr. Klaus Vietzeドイツ連邦共和国首席公使講演会」に出席予定でした。生憎講演会は中止となりましたが当初の予定通りご来県。おかげでじっくりと時間をかけてお互いの様々な課題についての意見交換や日独交流に関する貴重な情報共有をすることができ、講演会がなかったことは結果的には嬉しい誤算となりました。

自身も高校時代はサッカー部でまた3年時はキャプテンとして、3年連続インターハイ出場経験のある住谷会長は、40年にわたりライフワークとして携わってこられたスポーツ少年団の活動の経験から「将来の良好な確固たる日独関係を築きたいなら、今やるべきことはただ一つ、若者の育成あるのみ。私達に一刻たりとも猶予はない！」との持論を熱く語られ、我々はその熱い思いに終始圧倒され通してでした。

翌日の9月6日、千葉県日独協会のルーツである習志野霊園をご案内し、無念にも祖国への帰還が叶わなかった30名のドイツ兵の冥福を祈りお詣りいただきました。

また、海浜幕張の「高円宮記念JFA夢フィールド」では、ちょうどU19日本代表の紅白試合が展開されていて、香川県のJ3チーム「カマタマーレ讃岐」社長を務めた経験もある住谷会長は、若者の動きとボールの行方を食い入るように追いかけておられました。

軽い昼食の後、国登録の有形文化財である四街道市の近藤家住宅長屋門も視察し、千葉県日独協会の会員で当長屋門の主でもある近藤貴子さんからよく冷えた甘いスイカと抹茶アイスで丁重におもてなしを受けました。その後、邸宅の各部屋を一つ一つご案内いただき、貴重な写真とともに大変興味深いお話もたくさん伺うことが出来ました。

「県」とドイツの「都市」との姉妹提携に深い関心がある住谷会長は「今回のご縁を大切に、これからも千葉県日独協会のご指導とご協力よろしくお願いします。そして次回は是非、千葉県日独協会の皆様が香川県にてお迎えできればと考えております。」とのメッセージを託して2日間の千葉の視察を終え、成田空港から帰路につきました。

(常任理事兼事務局長：植松 健)

あるドイツ軍人との出会い



ドイツと私 - 本名 龍児一

これまでドイツという国に特段の興味を持っていなかった私のドイツとの縁は、あるドイツ軍人との出会いによって急速に深まりました。2018年秋、在京ドイツ大使館国防武官予定者として来日したカーステン・キーゼヴェッター(Karsten Kieseewetter)大佐と防衛省内での研修で知り合い、ドイツに関する様々なお話を聞くうちにドイツの歴史や文化に興味を持ちました。彼はまた、第一次世界大戦中に捕虜として大分で病死した曾祖父の弟ユリウス・パウル氏(Julius-Paul Kieseewetter)のお墓を探しており、歴史に興味を持っていた私はこれに協力したところ、地元で研究をされていた方の協力を得て、大分市に現存することができました。その後、最初の個人的な墓参のアテンド、翌年以降の慰霊祭参列などに伴う研究を通じて彼との友情、私のドイツに対する関心が深まり、いつしか私はドイツ語の勉強を始めていました。



2021年は、日独友好160周年にあたり、日独交流史の編纂協力や来日したドイツ艦「バイエルン」の歓迎行事に参列する機会がありました。また、2020年に大分の墓地で植樹された「日独友好の桜」が早くも4月に花を咲かせました。

「歴史を振り返ると、両国の関係には良好な時期もあれば、少なかつたとはいえ良くない時期もあり、その両方が私たちの関係をより緊密で強固なものにしてくれたことがわかります。」とは、Die Eiche25周年記念号での彼の言葉ですが、ここ数年の彼との親交、日独交流史の研究などを通じて、これらを学び新たな日独友好を築く場に立ち会えたことを大変嬉しく思います。



彼の任期が終わり、帰国する日もいずれ来てしまいますが、ドイツに興味を持った時期がコロナ禍とも重なったこともあり、未だ訪独経験のない私にとり、彼との再会のための訪独が最初の機会となるでしょう。



「日独交流160周年軍事協力を超えて」は、以下のリンク及びQRコードからご覧になれます。

<https://www.germanyinjapan160.com/>



Dr.シュテファン・ケラー Düsseldorf市長と経済派遣団 来日

9月12日に、Dr.シュテファン・ケラー・デュッセルドルフ市長が同市の経済派遣団とともに来日されました。ご一行は12日、13日の二日間、姉妹都市である千葉県を視察されましたが、市長のご希望により、当協会との懇談会が13日のお昼から四季亭（柏市）にて行われました。



市長と日本庭園を散策

懇談会にはケラー市長、経済派遣団とその関係者総勢10名、千葉県庁職員2名、DJGアム・ニーダーラインから1名、当協会からは金谷会長、植松事務局長と筆者の3名が参加しました。市長、会長の挨拶で始まり、お互いのこれまでの友好関係に感謝し、更なる交流の発展を願い、終始和やかな懇談でした。最後に市長から会長へサッカー・ブンデスリーガ2部の地元チームに所属する日本人選手3人のサインが入ったユニフォームが贈られ、趣のある日本庭園で記念撮影をし、次の訪問地である柏の杜へとお見送りをしました。



懇談の様子

ご一行は14日のデュッセルドルフの夕べに参加（次の報告記事）。派遣団として3年ぶりの来日に、団員の方が「実際に対面で会えるということは、商談のきっかけにもつながり、とても大事」とお話されていたのが印象に残りました。

（常任理事：本橋 緑）

Düsseldorfの夕べ参加報告

2022年9月14日、ホテルニューオータニ、鳳凰の間で3年ぶりに開催されました。

このイベントはデュッセルドルフ市、NRW州、メッセ・デュッセルドルフが主催し、定期的に開催されているもので、デュッセルドルフ市とパートナーシップ関係にある千葉県より、代表として熊谷知事が参加された他、デュッセルドルフ駐在経験者、デュッセルドルフ見本市の出展者、また、同市との交流の関係者が広く招待され、500名以上の内外関係者が参集しました。千葉県からの誘いにより、千葉県日独協会からも金谷会長を含め、10名強の会員が参加しました。



協会メンバー集合写真



ドイツ大使を囲んで

熊谷千葉県知事の乾杯音頭の後、懇親会が行われ、当協会参加メンバーも金谷会長を筆頭に、駐日ドイツ連邦共和国大使Dr.グレーメン・フォン・グッツェ氏等、当レセプション主要参加者と精力的に交流を図り、当協会の認知度の向上に努める等、非常に有意義な一時を過ごしました。（理事：坂田 博）

新入会員紹介（笹生 健司さん）

はじめまして。私は、千葉県庁在職中の1995年に、ジェトロ・デュッセルドルフに研修生として派遣されました。その後だいたい経って、国際課に配属になり、同地で開かれる日本デーに出展したり、デュッセルドルフからの奨学生を受け入れたり何かとドイツとの関係も途切れることなく続いておりました。その中で、千葉県日独協会の皆様とも知り合い、いくつかの行事にも参加させていただきました。昨年、県庁を定年退職したのを機に、懐かしい本会の活動に再び参加させていただきたいと思い入会させていただきました。現在は、海浜幕張にある千葉県国際交流センターで働いており、引き続き国際交流等に関わる仕事をしております。協会様の行事を通じて、ドイツとの関係をさらに深めていければと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。



書籍/Buch

今年度の青壮年部のドイツ歴史研究会においては、第一次世界大戦におけるドイツ人俘虜に関する研究、昨年に引き続き、旧ドイツ領に関する講演、プロイセンの歴史の研究をテーマアップしていますが、ヴォルガ・ドイツについてのテーマアップの要請が、メンバーよりあり、追加しました。切り口としては、歴史的経緯とその言語的な特色かと思っております。その歴史的な経緯について18世紀エカテリーナ二世による入植の布告から19世紀から20世紀初頭のドイツ人の辿った歴史、両大戦における苦難な状況が丁寧に記載されています。彩流社刊 ¥2,500-税抜き（常任理事：勝見 浩明）



今後の予定

■習志野ドイツフェア&グルメフェスタ 2022

日時：10月22日-23日 12:00-20:00 (19:00 23日)

場所：JR津田沼駅南口 モリシア 2F 協会パネル展示を行います。

■パーゼンドルファーを聴く会 一土屋常任理事が演奏されますー

日時：10月28日 12:35-12:50

場所：市川市役所第一庁舎2階 市民活動スペース

■ドイツ軍人慰霊祭

日時：11月23日 11:00-12:00

場所：習志野霊園他（詳細は、別途、ご案内致します）

■ベルリン、ブランデンブルク地方の講演 ー青壮年部ドイツ地誌研究会ー

日時：10月30日 18:00-19:30 ZOOM形式

講師：久保田さん、キーツマンさんによる建築物をリノベーションして使い続ける文化紹介を行っていただきます。

■旧ドイツ領「エルザス＝ロレーヌ地方」ー青壮年部ドイツ歴史研究会ー

日時：12月18日 18:00-19:30 ZOOM形式

講師：会員 衣笠講師（神戸大学大学院）

会員情報

新人会員 笹生 健司 千葉市中央区

小原 陽子 市川市

法人会員 医療法人 同和会 千葉病院、社会福祉法人清和会、
(株)京葉ビル管理、(株)和幸電気工事

編集後記

千葉県日独協会の活動には、様々な内部活動（運営委員会、編集委員会、青壮年部等々）と同時に外部活動も重要な位置づけと捉えることができます。今月号は、今年度がスタートしてから、千葉県日独協会の対外活動が活発に行われていることが伝わったかと思えます。今年度より協会組織活動の年間活動計画表も整備されましたが、今後、年次、通年単位での活動目標を立案して協会活動の将来を見据えた活動を行う動きも必要かと思えます。（勝見 浩明）